



## 桜、散りゆくころ

わたしたち日本人が桜を好むのは、一斉に咲き、「潔く散る」からだと言われている。だが、違う見方もあるのではないか。わたしには桜はとも気まぐれに映る。派手に開花し、すぐに「このくらいでいいでしょう？」という感じで、あっさりと、あっという間に散ってしまう、何て気まぐれな花だろうと思ってしまうのだ。

サッカーの中田英寿が、イタリアに渡り、ウンブリア州の州都を本拠地とするチームに入団したとき、同僚に一人のクロアチア人選手がいた。非凡な突破力を持ち、左サイドを駆け上がって強いシュートを放つ、玄人好みの選手だった。しかし、バルカンの血が濃いせいか、好不調の波が激しかった。よく走って決勝点を奪う試合があるかと思えば、ほとんど動こうとしない日もあった。

どうしてそんなに気まぐれなのか、と聞いたことがある。すると彼は答えた。「目覚めたら、まったくやる気が起きない、誰にでもそんな朝があるはずだ、そんなときに、頑張るやつのおかしさ」きまじめな国民性において、気まぐれは、あまりほめられない。だが、必死になる瞬間を自ら選び、このゲームだけは絶対に負けられないという日に備えているという言い方もできる。

1970年代半ば、エリモジョージという個性的な馬がいた。一番人気に押されると惨敗し、人気が下がると勝ってみせる、ファンは「気まぐれジョージ」と呼んでいた。75年夏、悲劇が起こる。放牧されていた牧場が大火災に遭ったのだ。多くの馬が失われた。生き残ったのはエリモジョージ他、ほんの数頭だったらしい。

だが、翌76年春の天皇賞、十七頭中十二番人気だったエリモジョージは、不良馬場の中、見事逃げ切って、勝利する。おそらく「気まぐれジョージ」は、このレースだけは絶対に負けられないと思っていたのだ。不慮の火災に遭った仲間の馬のために、また仲間たちから力を得て、走ったのだと思う。「気まぐれジョージ」の勇姿は、桜が散りゆくころの鮮烈な記憶として、わたしの脳裡に刻まれている。

村上龍